ルター新聞
Die Luther Zeitung
ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr.73

ルターはなぜ「聖書のみ」と叫ぶのか？

A.Traini 画 “The Life of Martin Luther”
（アメリカで500年を記念して出版されたとびだす絵本）

今年、研究所では「ルターと聖書」というテーマに取り組んでいる。その理由は、昨年末約三〇年ぶりに日本聖書協会から聖書の新しい翻訳が出版された事、そしてルターといえば「聖書のみ」が一大スローガン（標語）だからだ。

しかし聖書がキリスト教にとって大切なことは、そもそもあまりに当たり前。

そんな当たり前のことを、ルターはなぜ改めて声を大にして問題にしたのだろうか。そして、それがなぜ「聖書のみ」というルターの宗教改革のスローガンにまでなったのだろうか。

スローガンというものには、落とし穴がある。それは、そのスローガンの内に秘められた深い意味が、単純化し平板化し単なる決まり文句、建て前になりやすいからである。要注意！

ルターは、聖書になぜあれほどこだわり、「聖書のみ」を唱え、聖書の翻訳に心血を注いだのだろうか。その深い思いを、私たちも学びたい。

（え）

今号の内容

2面　ルターと聖書
3面　二〇一九年 牧師のためのルター・セミナー報告「ルターと聖書」をめぐって熱く学ぶ！
4面　シリーズ「人間ルター」⑪ 手紙の人ルター
ルターこぼれ話 ―ルターとウェルギリウス
5面　ルター研究者・名著シリーズ ―今井 晋『ルター』
ルターのことば
6面　私のルター研究 ―現代社会の中のルター
「切手にみるルター」㉙
ルター訳聖書 その4
7面　本の紹介
ルター『後期スコラ神学批判文書集』
ルーテル学院百十周年に考える 私たちの「ルター研究」
8面　研究所ニュース

ルターと聖書

日本福音ルーテル三鷹教会牧師　高村　敏浩

「ルターと聖書」と聞いて多くの人がまず思い浮かべるのは、彼が聖書をドイツ語に翻訳したということでしょう。聖書の翻訳作業はしかし、客観的かつ中立的な作業でしょうか。昨年一二月に聖書協会によって刊行された新しい聖書の訳「聖書協会共同訳」が明らかにするように、翻訳作業は必然的に解釈を伴います。（この訳がルーテル教会にどのような影響を与えるのかということについては、立山忠浩先生を中心にして研究や報告が行われています。）ルター自身もまた、一五三〇年に書いた「翻訳についての手紙」（『ルター著作集』第一集九巻）の中で翻訳が解釈であることを明らかにしています。

「翻訳についての手紙」でルターは、ローマ人への手紙三章二八節をギリシャ語の本文にはない「ただ（sola）」という言葉を補って、「わたしたちはこう思う、人はわざによらず、ただ信仰によって義とされる」と訳したことについて説明を行い、その判断の正当性を主張します。ここで取り上げられている「ただ信仰によって」、もしくは「信仰のみによって（sola fide）」は、「恵みのみによって（sola gratia）」と「聖書のみによって（sola scriptura）」と共に宗教改革を特徴づける三つのsolaとして知られています。

アメリカでは、二〇一七年に宗教改革五〇〇年をおぼえ祝う中で、このうちの「聖書のみによって」に関する記事が数多く出版されました。これらの多くはいわゆる福音派（Evangelicals）の牧師や神学者によって書かれたものでしたが、その中の少なくない人たちはルターの意図することを間違って受け止め理解しているようでした。つまり、（私自身と）聖書以外は必要ないという主張として理解したわけです。

しかし、宗教改革の標語とされていく「聖書のみによって」を、ルターはそもそも否定的な意味合いで用いていたようです。ティモシー・ウェンガートはその著書*Reading the Bible with Martin Luther: An Introductory Guide*（Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2013）の中で、少なくともラテン語に関して言えば、「聖書のみ」は熱狂主義者との結び付きで彼らを批判する言葉として用いられていたことを示しています。それではしかし、肯定的な「聖書のみによって」を、ルターはどういうものとして理解していたのでしょう。

ルターは原則として、「聖書のみによって」をprima scripturaの意味で主張していたとされます。それは、「聖書が神学の唯一つの源だ」ということではなく、「神学のための道具や資料、そして神学的理解や解釈、主張のすべては、聖書をその最終的な源泉および規範として判断される」ということです（Erik Heen, “Scripture,” *Dictionary of Luther and the Lutheran Traditions*, ed. by Timothy J. Wengert（Grand Rapids, MI: Baker Academic, 2017）.）。

その与えた影響の大きさから、ルターを何か特別で変異的な存在として捉える傾向が長く続いてきました。カルヴァンなどについても同様なことが言えるでしょう。しかし、二〇世紀の半ばから、ルターや他の一六世紀教会改革者たちを、聖書解釈の歴史の系譜の中で理解しようという流れが出てきました。ルターは決して先行する時代、つまり歴史から断絶した存在ではなく、むしろ先人たちの釈義の影響を受けているという理解です。事実ルターは、グロッサ・オーディナリア（*Glossa ordinaria*）と呼ばれる中世に編纂された聖書注解書やリラのニコラウス、さらにはエラスムスなどの同時代人の聖書解釈も利用し、それらと対話する中で聖書を解釈しました。また、ルターはそういった書物とだけではなく、ヴィッテンベルクの同僚たちと共に聖書を解釈しました。それは決して、つねに肯定的な態度であったということではありません。ときにはその主張に賛成し、ときには疑いを挟み、ときには真っ向から対立しました。また、無視を決め込んだことだってあったでしょう。しかし、ルターは決して独りで、孤立して聖書を理解したのではなかったのです。

「ルターと聖書」を、ルターの聖書解釈として理解すると、そこに彼と信仰の先人たちとの交流を見ることができます。そして、ルターの翻訳した聖書や聖書解釈を通して、現代に生きる私たちもまた、ルターとの交流を体験することができるのです。

二〇一九年・牧師のためのルター・セミナー報告（五月二七～二九日）

「ルターと聖書」をめぐって熱く学ぶ！

今年も「牧師のためのルター・セミナー」が、例年のごとく三浦半島のマホロバマインツで開かれた。テーマは「ルターと聖書」。参加者は牧師二三名、神学生一名、信徒六名の三〇名である。一コマ80分の発題（講義）が一〇本も並ぶ、勉強漬けの二泊三日であった。

それぞれの発題の要旨を、簡単に紹介しておこう。

宮本新「どこで読む、聖書？」 今日、聖書を誰がどこで読んでいるのだろうか、という意表をつく問題提起。個人が個室で読む、テロリストが自己弁明のために読む。しかし何と言っても教会の礼拝で読む。なぜなら聖書の中にキリストがいるからだ、とルターは語ると結論付けていく。

立山忠浩「聖書協会共同訳がもたらしたこと」 新しい翻訳・共同訳の目玉は、「ピスティス」の訳である。従来「信仰」と訳されてきたが、今回は「真実」という訳語も採用。その「ピスティス」という語をパウロの三大書簡から一語一語丁寧に抜き出して検討。更にルターがその「ピスティス」をどう訳したかにも言及し、我々ルター派の今後の課題を示す。

高井保雄「ルターとカトリック教会の聖書観」 ルターが聖書解釈において、いかにして中世のいわゆる四重義解釈法を克服していったかを論じる。それに対してカトリックの今日の聖書観を第二バチカン公会議に基づいて解説していく。

高村敏浩「聖書の権威」 聖書をめぐるアメリカ神学界の動向を紹介。とくにG・フォルディに注目。彼は、聖書の権威の源泉を、アメリカでしばしば顕著にみられた逐語霊感説や聖書無謬説で説くのではなく、ルターに由来する「律法と福音」という解釈法の中にみているという。

江口再起「ルターと翻訳」 ルターは聖書のドイツ語訳を果たした。その際、ルターが出版した『翻訳についての手紙』を検討。更に二〇世紀に活躍した三人のユダヤ人哲学者（ローゼンツヴァイク、ベンヤミン、デリダ）の翻訳論を紹介しつつ、「翻訳の神学」ともいうべきものを模索する。

多田哲「ルターとドイツ語」 ルターの、聖書のドイツ語訳によって標準ドイツ語が確立したと言われているが、そのドイツ語の歴史を概観。そして実際、ルターの使ったドイツ語、更には活版印刷本との関係などについて検討していく。

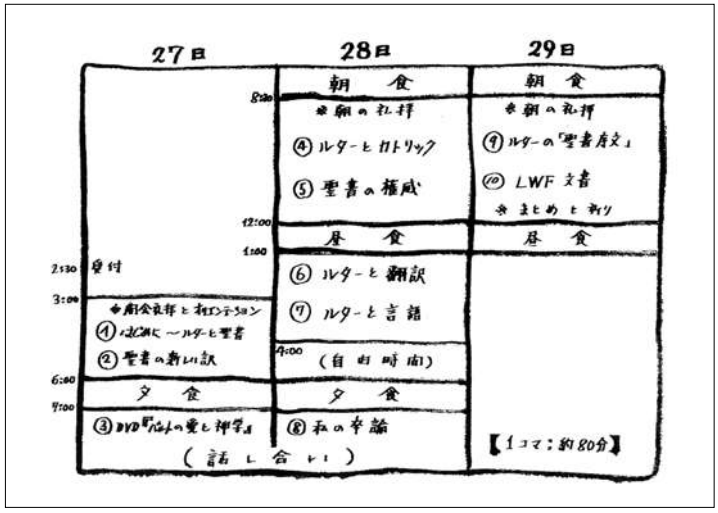
石居基夫「『聖書序文』にみるルターの信仰と神学」 ルターは聖書翻訳に際して「聖書序文」を書いたが、その序文を道しるべに、今日の「信仰」を問う。ルターは「信仰」を、聖書の説教を通して我々一人一人に働きかける神の業だと言う。そしてそれは「律法と福音」という形を通して働く。

これら七本の講義の後、ルーテル世界連盟（LWF）が現代における聖書研究の指針として発表した文書をめぐって**江本真理「はじめに言があった」**の発題の下、全員で討議をした（なおこのLWF文書は「ルター研究（別冊五号）」に訳文が収録されている）。

更に二日目の夜には、この一～二年に神学校を卒業したばかりの二人の先生に、卒論について発表をしてもらった。**森田哲史「賀川豊彦の協同組合運動とその精神」**は、賀川がおし進めた協同組合運動を紹介。行政や営利企業によっては行き詰ってしまう現代社会においてこそ、協同組合の精神が生きてくるのではないかと問題提起。**中川裕子「八木誠一『場所論的神学』について」**は、日本人が生み出した独創的な西田幾多郎の哲学を土台にもつ、超難解な八木神学に挑戦。従来の人格主義的神学に対して、八木は場所論的神学を提唱したことを丁寧に説き明かす。

この報告を書くために、これら一〇本の発題のレジュメを改めて読み直してみたのだが、いずれも内容が濃い。こんなにあの三日間で勉強したのかと、我ながら驚いた……。（え）

（＊なお、これらセミナーでの発題は、「ルター研究」一六号（二〇一九年発行）に、論文となって収録されます。）



2019年　ルターセミナープログラム（5月27～29日）

シリーズ「人間ルター」11

手紙の人ルター

日本福音ルーテル日吉教会
牧師　多田　哲

中川浩之・画

ルターのイメージといえば、当時の絶大な権力であったローマ・カトリック教会を相手に抵抗（プロテスト）した大胆不敵な改革者というのが先行しがちで、彼が論敵に向けた暴言ともいうべき言葉を読むと、ルターという人がとても粗野な人物にさえ思えてきます。ところが、ルターは牧会者として悩める人に寄り添うことを疎かにはしませんでした。ルターは人々の和解、慰め、励ましのために多くの手紙を書き送っています。それらの言葉は、論敵に向けられた荒々しい言葉とは全く異なる配慮に満ちた優しいものです。しかし、決してうわべだけの気休めの言葉ではありません。それは、改革運動の原動力ともなったルター自身の実存的な問い、すなわち、いかにして人は神の前で義とされるのか、救われるのかという問いに根ざしたルターの神学的確信から紡ぎ出された言葉です。その意味で、論敵に向けられた荒々しい言葉と、悩める人に向けられた優しい言葉は、装いこそ違えど本質は同じなのです。ルターの手紙は、単なるアドバイスではありません。神がどれほど私たちを愛してくださっているか、そのためにキリストが十字架にかけられ、その十字架にこそ神の御心が表されているということを伝えようとしています。ルターの手紙は信仰の養いであり、宣教です。

ルターの死後、間も無くしてルターの手紙がまとめられ最初の書簡集が出版されました。それから、現代に至るまで幾度もルターの書簡集が世に出されています。その時その場の状況に応じてルターの手紙が人々に助言を与えてきたことが、時代と地域を超えてルターの書簡集が出版され続けている理由のように思います。日本では、T・G・タッパートが編集した『ルターの慰めと励ましの手紙』が二〇〇六年に内海望牧師の翻訳によってリトンから出版されています。

ルターこぼれ話

「ルターとウェルギリウス」

所長　江口　再起

死の前日に書かれたルターの遺言メモ。「五年間、農夫でなければウェルギリウスの農耕歌は理解できない。四〇年間、支配してみなければキケロの政治書簡は理解できまい。一〇〇年間、預言者と共に教会を指導しなければ聖書はわかるまい。」

ウェルギリウス？Who？　彼は紀元前七〇～一九年の人。一口でギリシア・ローマ文化と言うけれど、ギリシア文学がホメロスとすれば、ウェルギリウスはローマ（ラテン）文学の雄。『田園詩』や『アエネーイス』が有名。

我が国では専門家以外は誰も知らないが、ヨーロッパでは誰でも知っている。『アエネーイス』はトロイアの英雄アエネーイスが落城後、各地を放浪し、ついにローマに至り建国の土台となるという物語。その途中、カルタゴでは女王ディートに「トロイア戦争の木馬」を物語り、女預言者と共に冥界めぐりをする等々。そうしたこともあって一三世紀のダンテ『神曲』では、ウェルギリウスが冥界降りの案内人になっている。つまり西欧文化にとって、いわば日本文化の中の『源氏物語』のごとき位置にあるのである。したがって印刷時代には真っ先に作品集が出版されたという。

というわけでルターもよく読んでいた。『ドイツミサ』を準備したとき、曲に歌詞をつける際、まずはウェルギリウスに学んだ、と友人への手紙に書いている。ルターは、古典文化をたっぷり栄養にして仕事をした人だったのだ。

ウェルギリウス像　切り絵・竹田孝一

ルター研究者・名著シリーズ

今井 晋『ルター』（『人類の知的遺産』第二六巻）

所員　立山 忠浩

『人類の知的遺産』（講談社）シリーズは八〇巻をもって完結した（一九七八～一九八六年）。キリスト教関連では『イエス・キリスト』『トマス・アクィナス』『カルヴァン』『バルト』など著名な人物が目白押し。すべて執筆者は邦人で、これがシリーズの特徴となっている。『ルター』（一九八二年）は同志社大学の教授であった今井晋の執筆である。

同氏の博士論文（京都大学）の「ルターにおける実存と神秘主義」からも察せられるように、彼のルター理解の特色は、神秘主義を根幹に据えることである。キリスト神秘主義、信仰神秘主義、義認神秘主義、終末論的神秘主義など聞き慣れない合成語に満ちている。

今井は、石原謙、佐藤繁彦、北森嘉蔵などの日本の代表的なルター研究者たちを取り上げ、彼らのルターの理解に色濃い神秘主義の影響を見るのである。例えば北森嘉蔵の「神の痛みの神学」を我々は、ルターの十字架の神学から派生した思想と認識するが、今井の視点は異なる。北森が、ルターの「痛みにおいてキリストと一つとなる」という神秘主義的な表現に注目したことに焦点を当てる。そして「神の痛みの神学は神の痛みの神秘主義である」という北森の言葉に注視するのである。その他のH・オーバーマンやP・アルトハウスらの解説もこの線に沿いつつ、上述の「～神秘主義」と呼ばれるようなルター独特の思想の形成が論じられている。

ルターにタウラーなどの神秘主義者たちの影響を認め、聖餐論には超自然的な理解を積極的にルターが取り入れたことはこれまでも指摘されて来た。ルターの主要な思想をすべて「～神秘主義」に納めることができるかどうかの疑問は否めないが、根底にある神秘主義的な影響を探り出したことは本書の貢献である。これは聖書を学ぶ際にも言えることであるが、ルターの研究を志す者は、秘儀なる方への怖れと祈りなしにはなし得ないことを喚起していると言えよう。

ルターのことば

我ここに立つ。

所員　高井 保雄

「我ここに立つ。」ルターのこの言葉は、宗教改革の出来事の中で最も有名なものとなった。1521年4月、異端の嫌疑を受けていたルターは、領主のザクセン選帝侯の配慮の故か、審問の場がローマではなく、ドイツのヴォルムスの司教邸の広間で開かれる神聖ローマ帝国議会に召喚された。そこには、皇帝に選ばれたばかりの若いカール5世が座し、教会の異端審問官を始め、帝国の顧問官達、諸外国の公使、諸侯が立ち並んでいた。病みあがりの痩せた修道士ルターは目の前に積み上げられた自分の著作について、それらが自身の著作であるか問われ、小声でおずおずとそれを認めた。更に、これらの著作の内容を固執するか、それとも取り消すか、と問われると、答えをじっくり考えたいので考える時間が欲しいと願った。審問官は、一日の猶予を与えた。

翌日、議場の人々の大方は、前日のルターの様子から、彼はその言動を取り消すだろうと予想していたのだが、結果は全く違った。彼は、ドイツ語、更にラテン語で、自分の著作を擁護し、教皇の法や教えが信仰者の良心に反すると主張し、論敵に対する著作等の取り消しを拒絶した。しかし、皇帝を始め多くの外国人は十分理解出来ず、ルターは取り消すつもりだと思う者もいた。そこで審問官は、改めてはっきりした言葉での取り消しを迫った。この時のルターの言葉が「私は良心と神の言葉とにつながれているので、聖書からの証言と明白な論拠によって確証を与えられないなら、何も取り消すことは出来ないし、取り消さない。**我ここに立つ**。神よ助けたまえ。アーメン」と言ったとされるものだ。

ルターのどの伝記映画でも、ここが頂点の名場面なのだが、実は、「我ここに立つ Hier stehe ich.」の名言については諸説がある。ルターが拉致されて生死不明になった直後にヴィッテンベルクでまかれたチラシの見出しの句が「我ここに立つ。他に術無し。神よ助けたまえ。アーメン」で、これが審問中の名言として受けとめられて、世界中に広まった!?…というのが、どうやら事の真相のようだ。

私のルター研究 ―現代社会の中のルター

所員　宮本　新

二〇三〇年頃の都市生活者の人口は約五〇億人となり、現状のライフスタイルを維持するには地球が三つあっても足りないなどといわれている。他方、この世界にある資産の半分は一〇％の富裕層が握りしめている。私たちが祈り神学する足元は極端にバランスを欠いた世界になってきている。そこで普遍的な人間の本性に取り組むことと、直接的な課題に参与することとの間には、もうひとつ考察すべき領域がある。これらは自然発生したのではなく、近代以降の個別な価値観や考え方、そして社会の仕組みがあって起きているからだ。今から一〇〇年前にマックス・ヴェーバーが『資本主義の精神とプロテスタンティズムの倫理』で試みたのはそのような領域を開くことであった。その「精神」の源流は驚くべきものだった。人間の貪欲や罪深さから醸成された仕組みではなく、むしろ宗教的な価値観と神学的洞察が深く絡まり合いながら、逆説的な連続性があることを描いたからである。

ヴェーバーにおけるルターの位置づけは決して高くはないが、しかしまた低くもない。この「精神」とその後の社会の「進歩と発展」の構図において、ルターは中世の修道院的禁欲主義（世俗外禁欲主義）から世俗内召命へとその突破口を用意したことになる。しかしルターは〝そこまで〟であり、〝そこから〟はカルヴァンとその後のピューリタニズムが主要な担い手となる。

しかしなぜ今、ヴェーバーなのか。そしてルターなのか。端的にルター神学の外部環境からの変化がある。すでに国内外の社会科学系の研究者たちがルター再考に着手している。ヴェーバーの預言的な結語となった「鉄の檻」はこんにちもまた異なるコンテクストで語りかけている。かつて「進歩と発展」の図式で捉えられていた社会の仕組みの限界が明らかになるとき、〝そこまで〟のルターの位置づけが反転する。たとえば、社会学者の大澤真幸が所得の再分配が上手くいく社会が良い社会と論じる際、北欧諸国とその背景にあるルター的なものへの考察に及んでいる。しかもルターのキリスト論を軸にしたものであり、社会学と神学とがヴェーバー同様に絡み合った考察になっている。まだまだ掘り起こされるべきものがルター神学とその周辺にあることは間違いないようだ。他に学び、他と取り組むルター研究の一例にもなる。

切手に見るルター ㉙

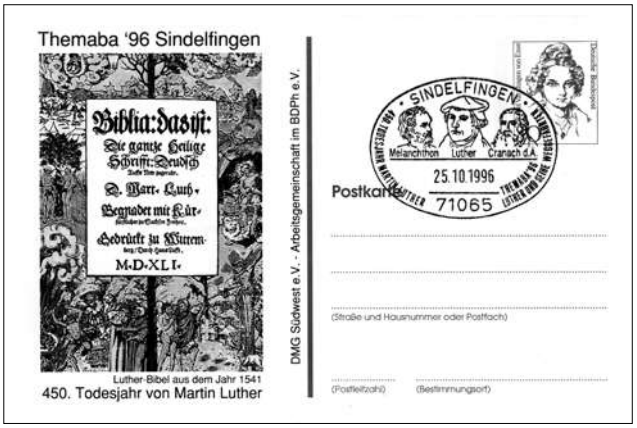
ルター訳聖書 その４

大分・別府・日田教会牧師　野村　陽一

「ルター新聞」の特集「ルターと聖書」に鑑み、4度ルター訳聖書を取り上げる。今回紹介するのは、1966年ルター没後450年を記念したはがきである。ドイツ南西部シュトゥットガルト近郊の小さな町ズィンデルフィンゲンで開催されたThemaba（何の催事かは不明）にあわせて発行されたはがきである。ちなみにこの町はメルセデス・ベンツのホームタウンでもある。

図柄は1541年版のルター訳聖書の中表紙である。この連載の第24回で取り上げた同じく1541年版ルター訳聖書の中表紙と比較すると、題字は同じだが図柄が異なっており、前回のものは紋章が中心であったのに対し、今回のものは創世記の内容が図柄になっているようである。題字は「聖書、これは聖なる書物のドイツ語全訳、マルティン・ルター博士、ザクセンの自由のために選帝侯の恵みによって、ヴィッテンベルク　ハンス・ルフトによる印刷、1541」とある。

消印は当地の特別印で、左からメランヒトン、ルター、ルカス・クラナッハ（父）の肖像が描かれている。



本の紹介

ルター『後期スコラ神学批判文書集』 金子晴勇訳

知泉書館　2019年　5,000円 +税

所員　鈴木　浩

本書は金子晴勇先生が翻訳された、ルターの後期スコラ神学批判の著作である。1975 年に当時「ルーテル神学大学」と呼ばれていた学校に入学以来、金子先生には、ルターについて親しく教えていただいた。小さな学校で、クラスはいつも数人だったが、最初の学年のある授業で（金子先生の授業ではないのだが）、わたしが提出した期末レポート（倫理学）は、授業とはまったく関係のない高橋和巳の『邪宗門』についてだった。それはともあれ、秋のことだったと思うが、授業を終えられた金子先生が何やら本を片手にバス停に向かっておられた。友人から無料でもらった軽自動車を持っていたわたしは、先生をピックアップして三鷹の駅までお送りした記憶がある。先生が持っておられたのはラテン語の動詞変化表であった。ラテン語をひたすら独習していた私は、「先生でも『動詞変化表』を常に持っておられるのか」と感激し、同時に安心した。40 年近く前の話である。

さて、本書はサイズこそ小さく、冬ならオーバーの胸ポケットに入りそうだが、中身は重い。ルターの改革運動に至るその根底には、大学教授としての初期聖書講義があるのだが、それは当然ながら恩恵と（自由）意志の関係を軸とした中世後期のスコラ神学との対決の中ですすめられた。それが５つの文書として残されている。本書はそれらの翻訳と解説である。「恩恵を欠いた人間の力と意志に関する問題」（1546 年）、「スコラ神学を論駁する討論」（1517 年）、「ハイデルベルク討論」（1518 年）、「J. エック博士の中傷に反対する修道士Ｍ . ルターの討論と弁明」（1519 年）、「スコラ神学者ラトムス批判」（1521 年）の５書である。これらのうち、最初の４つは金子先生の訳をはじめすでに邦訳があるのだが、問題は最後の「スコラ神学者ラトムス批判」である。ヴァルトブルク城幽閉中に著述されたこの文書は、オランダのルーヴァン大学のラトムスのルター批判への再批判の書。内容は、ルターのスコラ神学批判の総まとめであり、信仰義認に至るルター神学の最初の体系の骨格が見事に提示されているが、なにぶん内容もラテン語も難解すぎる。恐らく邦訳不可能と思われていた。ところが驚くべきことに、ついに金子先生によって日本語として読めるようになったのである！繰り返し読む価値がある。ただ感謝のみ。

ルーテル学院百十周年に考える

私たちの「ルター研究」

石居　基夫

今年は、神学校創立の一九〇九年から百十年目を数える。ルター研究所では、この時を記念して、すでに案内させていただいているように「ルターと日本」をテーマに秋の講演会を企画している。江口再起、青田勇両先生に講師をお願いしているが、日本におけるルター受容を研究する興味深い取り組みとなるように思う。

さて、この機会に、改めて本学の、またルーテル教会のルター研究ということを考えると、まず、何と言ってもルター原典の翻訳作業を著作集編纂として手がけてきたことは大きい。聖文舎がこれを担ったが、ルター研究所が引き継ぐ形で、出版社リトンの協力のもと第二集をほぼ完成させるところにある。同様に『一致信条書』の完全翻訳を成し遂げたことは、ルーテル教会らしい貢献となった。これらは、日本のルター研究にとって非常に大きな意義をもっている。

次に注目すべきは、ルターの聖書との取り組みを研究することでルター神学の核を捉えようとしたことだろう。佐藤繁彦は『ロマ書講解に現われしルッターの根本思想』を、また岸千年は『ヘブル書講解におけるルターの神学思想』を著し、初期ルターの聖書との取り組みからその神学思想に迫っている。いずれも、大きな影響力を持った研究といえよう。

また、北森嘉蔵の『宗教改革の神学』は欧米のルターに関する神学研究を批判的に取り上げながら、ルター神学に迫る秀作を残しているし、徳善義和は、『アウグスブルク信仰告白とその解説』や、『キリスト者の自由～全訳と吟味』を通じて、歴史神学的視点からルター神学の真髄を丁寧に解き明かしてくださった。

ユニークなところでは、石田順朗は『牧会者ルター』によって、また石居正己は『教会とは誰か』によって、教会の極めて実践的なコンテキストの中でのルターとその神学とを描いて見せてくれている。「本学ならでは」の仕事と言えるだろう。

さて、21世紀にどのようなルター研究が重ねられるか。私たちの研究が問われている。

九州学院神学部 校舎・寮 1911

研究所ニュース

●牧師のためのルター・セミナー

五月二七～二九日、例年のごとく三浦半島のマホロバマインツで「牧師のためのルター・セミナー」が開かれました。詳しくは三面をご覧ください。

●「秋の講演会」

研究所では、毎年秋に講演会を開催しています。一一月一〇日、午後二時より日本福音ルーテルむさしの教会で開かれます。

今年は折しもルーテル学院大学・神学校が九州熊本で創立して百十周年に当たります。それを記念しての講演会です。主題は「ルターと日本」。左記のポスターをご覧ください。

●公開講座

ルター研究所の二〇一九年度前期の公開講座「ルターの生涯」（担当・江口）は七月に終了しました。後期は九月より「ルターの神学」（担当・江口）が始まります（毎週火曜四限目、ルーテル学院大学で）。

●所員会での共同研究

研究所では毎月一回、行事企画の打ち合わせなどの他、所員その他による共同の研究会が開かれています。二〇一七年の宗教改革五百年を機に発表された諸論文の検討や春のセミナー発題の中間発表、また各自の研究発表（「大学の神学」等）が行われています。更にジェンソン『ルター派の標語』の翻訳準備もすすめています。

●「ルター研究」一六号発刊

研究所の紀要雑誌「ルター研究」一六号が一〇月に刊行されます。内容は春のルターセミナーでの諸発表を各自が改めて整理し論文にしたものです。「ルターと聖書」をめぐる一〇本以上の、内容濃い論文集となります（定価二〇〇〇円＋税＋送料予定。ご希望の方は研究所までご連絡下さい）。

●佐藤繁彦文書の整理

日本におけるルター研究の先駆者である故佐藤繁彦博士のご遺族より貴重なノート等の文書を寄贈していただいたことは、すでにお知らせしましたが、それら文書の整理が、青田勇先生（日本福音ルーテル教会牧師、元副議長）を中心にすすめられています。佐藤博士は、戦前、日本ルーテル神学校の教授を務められ、その著書『ロマ書講解に現れたるルッターの根本思想』は日本のルター研究の金字塔です。秋の講演会で、青田先生による講演があります。

●献金のお願い

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（一〇〇万円）と皆さんのご支援（およそ一五〇万円）で成り立っています。（二〇一八年度のルター研究所への指定献金は九四万六四〇〇円でした）。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。（所長　江口再起）

ルーテル学院・ルター研究所
三鷹市大沢三―一〇―二〇
電話　〇四二―三一―四六一一
発行責任：江口　再起（所　長）
e-mail：Luther-studies@luther.ac.jp